

他科の先生に  
知って欲しい

## 豆知識・・・皮膚科編①

### 皮膚感染症迅速診断キットについて

三浦皮膚科医院 院長 三浦由宏



皮膚科の診断は視診、触診によるものが大きく、私たち開業医の日常診療で真菌の直接鏡検を除き、採血や皮膚生検などの検査を必要とする機会はそう多くはありません。

带状疱疹は典型例では臨床像による視診での診断が可能です。なかには単純疱疹や他疾患との鑑別が困難な非典型例が存在します。そして抗ウイルス薬による治療も、同薬がウイルスDNAの複製を阻害してウイルスの増殖を抑制することから、発症初期の投与であるほど治癒までの期間の短縮や重症化の予防が期待できます。臨床像のみでの診断が難しい症例では抗原検査やPCR法などが有用ですが、早期治療開始のために迅速に診断をする必要があります。带状疱疹迅速診断キットは2018年1月に発売され、使用方法はインフルエンザやコロナ診断で用いるキットと同じで、病変部から綿棒で検体採取し、約5～10分で診断可能です。もっとも感度の高いPCR法と比較して陽性一致率93.2%、陰性一致率98.8%、全体一致率96.2%と高い精度を示します。

実際に使ってみると顔面、特に眼、口唇や腰殿部に病変がある場合、単純疱疹と診断したものが带状疱疹であったり、上肢の単発する皮疹が带状疱疹であったりと自分の診断と逆の結果を示すことに驚いたことが何度もありました。

本キットの結果が陽性なら带状疱疹と診断できますが、問題は陰性時の解釈です。もっとも鑑別を要するのは単純疱疹です。陰性となったとき、それが带状疱疹であっても、初期の病変で水疱や痂皮形成などがみられない場合、検体が十分採取できず陰性になる可能性も考えられます。無論、検査キットの結果のみでなく臨床像とあわせての診断になりますので、やはり皮膚科医の目（視診）が必要です。なお、この問題は2023年2月に発売された単純疱疹用の迅速診断キットを併用することで両疾患を適切に診断することが可能になりました。

話はそれますが、爪白癬の診断には直接鏡検が必要です。その検体採取にはコツがあり、真菌培養でも陽性率がそれほど高くないことから、皮膚科医以外の診断は困難でした。ところが、同様の原理を用いた爪白癬迅速診断キットも2022年に発売され、今まで自分が積み上げてきたものはなんだったのかと、もうわけがわからなくなってきました。

ちなみに、ここで紹介した3種類のキットは皮膚科以外の先生にも使用可能です。上述のごとく非典型的な臨床像で診断に迷った場合には、非常に便利なツールになります。しかし、带状疱疹、単純疱疹や爪白癬は診断がついたら即終わりではなく、後に続く治療が非常に重要です。带状疱疹の場合、带状疱疹後神経痛以外にも髄膜炎、脳炎、膀胱直腸障害や運動麻痺などの合併症が発生したとする報告もあり、早期診断と抗ウイルス薬の適切な時期に適切な用量、用法での治療が重要です。爪白癬の場合も5つの病型があり、それにより治療法が異なります。幸い岡山県下には臨床経験豊富な皮膚科の先生がたくさんいます。もし带状疱疹、単純疱疹や爪白癬を疑ったり、迅速診断キットで診断されたりしたときは、ぜひともお近くの皮膚科にご相談ください。